

## 新 刊 紹 介

新  
刊  
紹  
介

1. 年号と東アジア  
——改元の思想と文化—— 水上雅晴編 高田宗平編集協力
2. 中世初期の〈謀叛〉と平治の乱 古澤直人著
3. 中世宇都宮氏——一族の展開と信仰・文芸——  
(戎光祥中世史論集 第9巻) 江田郁夫編  
中世の北関東と京都 江田郁夫・築瀬大輔編
4. 足利義輝・義昭——天下諸侍、御主に候——  
(ミネルヴァ日本評伝選) 山田康弘著
5. インド経済史  
——古代から現代まで—— ティルトンカル・ロイ著 水島司訳

水上雅晴編 高田宗平編集協力

### 『年号と東アジア』

——改元の思想と文化——

八木書店 二〇一九・四刊

A5 八二四頁 二二〇〇円

本書は二〇一七年の歴史フォーラム「年号と日本文化」、国際シンポジウム「年号と東アジアの思想と文化」の研究報告をもととする。共同研究の成果として七部二八章に及ぶ論文がおさめられ、豊富なカラー口絵、図版、附録が付されたきわめて重厚な書である。以下に目次を掲げる(副題は略した)。

水上雅晴「序」／所功「総論」／第一部「文字・言葉・記録」1 小川剛生「迎陽記の改元記事について」／2 石井行雄・猪野毅・近藤浩之「金沢文庫本『群書治要』移点の意味」／3 高田宗平「年号勘文から見た日本中世における類書利用」／4 大形徹「年号と貨幣」／5 名和敏光「中国出土資料紀年考」／第二部「朝鮮・ベトナムと年号」1 月脚達彦「近現代朝鮮のナシヨナリズムと年号」／2 ファ

ム・レ・フイ「ベトナムの年号史試論」／第三部「年号と正統性」1 清水浩子「年号と王朝交代」／2 多田伊織「受命と改元」／3 甘懐真「東アジアにおける四六世紀の「治天下大王」と年号」／4 福島金治「鎌倉期の年号勘申者の家と公武政権」／5 田中大喜「南北朝期日本の不改革年号と私年号」／第四部「時」の支配  
1 童嶺「五胡十六国前期「列国元年」紀年研究序説」／2 久禮巨雄「平安時代初期の王権と年号」／3 鶴成久章「一世一元」制度の淵源」／4 大川真「近世日本における一世二元論」／5 清水正之「年号と暦法」／第五部「改元の思想的要素」1 鄭吉雄「天命・暦法と年号」／2 赤澤春彦「日本中世における改元と陰陽家」／3 水口幹記「祥瑞改元から災異改元へ」／4 尾形弘紀「文字の想像力と改元」／5 水上雅晴「難陳」／第六部「年号と時間」1 武田時昌「中国古代の暦運説」／2 細井浩志「日本の古代における年号制の成立について」／3 末永高康「術数の原理」／4 吉野健一「近世民衆の年号認識」／第七部「資料紹介」1 高

田「国立歴史民俗博物館所蔵」「経光卿改元定記 寛元 宝治 建長」／2 所  
 「靈元上皇宸筆 国立歴史民俗博物館所蔵  
 「年号事」覚書」／附録 1 索引／2  
 統群書類従 改元関係記事索引／3 中  
 国・日本・朝鮮・ベトナムの公年号一覧

本書では政治史・社会史・科学思想史、漢学を受容、哲学など、多様な論点からの刺激的な検討が行われている。「序」で「年号学」が提唱されている通り、歴史・文学などを総合的に考える上で豊かな素材であることが感じられた。殊に朝鮮・ベトナムの年号にも目配りされ、取り上げられたことは重要であろう。

藤原経光「経光卿改元定記 寛元 宝治 建長」は本書の複数の論考で検討され、口絵・解題影印も詳しく掲げられている。興味深い史料で、少し蛇足を加えさせて頂きたい。本史料の副紙には「三个度」と見えるが、経光はこれ以前から改元定に参仕し、日記も記している。そして本文第一紙は端から余白が全くなく本文が書かれている。前半には逆継が見られる(高田氏解題)が、墨付を見ると本来は順継だった

であろう。とすると前半は傷みにより剥離しており、一部は惜しくも散逸した可能性もあるうか。紙背文書からは康元改元(建長八年)との関係も推測される。さらに「経光卿記抄 改元部」(歴史民俗博物館所蔵)は続く康元・弘長の改元記で、同様に経光による原形が存在したかもしれない。改元に携わる家に蓄積された史料のあり方が注目される。

二〇一九年には令和への改元も行われ、改めて年号への注目も集まっている。広く一読をお勧めしたい。(遠藤珠紀)

古澤直人著

『中世初期の「謀叛」と平治の乱』

吉川弘文館 二〇一八・二二刊  
 A5 四〇〇頁 二二〇〇〇円

本書は古澤直人氏の第二論文集である。氏の前著『鎌倉幕府と中世国家』(一九九一年)は、法制史的関心に基づく中後期鎌倉幕府論が主題であった。前著未収録の鎌倉幕府追加法や裁許状を扱った論考の書籍化

を評者は待望していたが、前著から四半世紀以上を経て、古澤氏の関心はより古い時代の政治史に移ったと思しい。

本書は「平治の乱」(一二五九年)を題に持つ最初の研究論文集であり、その他にも平安時代後期・鎌倉時代中期の「謀叛」に関わる諸論点が検討されている。目次と初出年は次の通りである。

序章 中世をめぐる全体認識の史学史と本書の課題(一九九七)

I 平治の乱の再検討

第一章 謀叛に関わる勲功賞について—中世成立期を中心に(二〇一三)／第二章 平治の乱における源義朝謀叛の動機形成(二〇一三)／第三章 平治の乱における藤原信頼の謀叛—再評価と動機形成をめぐって(二〇一三)／第四章 平治の乱の構図理解をめぐって—清盛黒幕説と後白河上皇黒幕説について(二部二〇一三)／第五章 平治の乱の経緯と結末について—「恩賞抄」解釈と河内祥輔学説の検証を通じて(一部二〇一三・二〇一八)

II 中世初期における謀叛の研究

第一章 御成敗式目九条成立の前提—平

安遺文・鎌倉遺文の「謀叛」用例の検討から  
（一九九九）／第二章 『玉葉』にみえる  
「謀叛」用例について（一九九九）／第三章  
頼朝の「謀叛」と「謀反」（二〇〇三）／  
第四章 和田合戦と横山時兼（二〇〇七）  
／第五章 御成敗式目制定の思想<sup>一</sup>二通の  
北条泰時書状の分析を中心に（一部一九九二）

終章 まとめと課題

序章では、史料編纂掛・東大国史科中心  
の考証主義<sup>II</sup>国史の正統派アカデミズムを  
相対化するものとして中田薫・三浦周行を  
位置づけ、一九三〇年代の牧健二と合わせ  
て、戦前歴史学から「戦後歴史学」への無  
意識の継承面の分析が不十分であると注意  
を促す。

大半が二〇一三年に初出の第I部は、平  
治の乱の政治史的研究である。依拠すべき  
古文書・古記録がないという「歴史学の試  
金石」（終章三六一頁）に取り組み、「心の  
中」の「真」（同三六二頁）や「生の真実」  
（あとがき三六六頁）は不可知であるとの研  
究姿勢への提言も目立つ。

第II部は、『御成敗式目』を終着点とし  
て、平安末期〜鎌倉中期における「謀叛」

「謀反」用例の分析や書状の読解に重点を  
置き、論点は個別武士団や鎌倉幕府と朝  
廷・本所との関係にも及ぶ。

第I部と第II部は別系統の研究のよう  
に見えるが、この構成は、保元・平治の乱  
にはじまる動乱の半世紀は「謀叛」とい  
語が頻出する（「謀叛の時代」でもあつた  
ため、その動乱の終息<sup>II</sup>平和の到来が御成敗  
式目制定に象徴されている（三三頁）との  
見通しによる。

第I部では、一九七〇年代以降の学説を  
批判し、一九六〇年代以前の「古典学説」  
を再評価する章が多い。論点の一つに、保  
元の乱後の源義朝への左馬頭補任がある。  
近年ではこれを破格だったとする説が支持  
を得ているが、古澤氏は第I部第二章で、恩  
賞として薄かったとする説を再評価した。

ただしその論証過程で、左馬頭と左馬権  
頭・右馬権頭との相違が意識されていない  
点や、『尊卑分脈』の注記を根拠に清和源  
氏諸人の「権頭」任官を事実と理解し  
ている点には再検討の必要を感じた。

また第I部一章注19に挙がる二〇一八年  
刊行の拙稿は、平安中後期の左馬頭一覽や

藤原信頼と源義朝の関係など古澤説に反す  
る論点を含む。原論文初出後に刊行された  
拙稿まで拾う自配りには（誤植があるとはい  
え）感服したが、それらについてのご意見  
を伺いたかったところである。（長村祥知）

江田郁夫編

『中世宇都宮氏——一族の展開と信

仰・文芸——』

（戎光祥中世史論集 第9巻）

戎光祥出版 二〇二〇・一刊

A5 三三六頁 四〇〇〇円

江田郁夫・築瀬大輔編

『中世の北関東と京都』

高志書院 二〇二〇・一刊

A5 二八〇頁 六〇〇〇円

令和二年（二〇二〇）一月、中世の北関  
東を舞台とした論文集が二冊同時に刊行さ  
れた。江田郁夫編『中世宇都宮氏』と同・  
築瀬大輔編『中世の北関東と京都』である  
（副題省略、以下同）。このことは地域史がい

まなお衰えていないことを意味し、非常に心強い。

はじめに『中世宇都宮氏』から紹介する。第一部「宇都宮一族の成立・展開・終焉」は政治面を、第二部「宇都宮一族の信仰・文化・肖像」は文化面を扱った内容となっている。

第一部。野口実「宇都宮氏の成立と河内源氏」は、地域から捉えられてきた宇都宮氏の成立を中央から捉え直し、院政期に京都から下野へと留住・土着していく過程を河内源氏の奥羽進出との関わりから迫る。

高橋修「笠間時朝論序説」は、中央を源とする武士が、鎌倉期、地域で本領を形成していく様相を、宇都宮一族笠間時朝をケースとして検証する。市村高男「中世宇都宮氏と美濃・伊予」は、美濃宇都宮氏に着目し、南北朝期前後の動向を伊予宇都宮氏との関係や室町幕府・鎌倉府と絡めて詳述する。杉山一弥「嘉吉・享徳期の東国争乱と下野宇都宮氏」は、室町期、鎌倉府体制下の宇都宮氏が幕府・美濃宇都宮氏とつながり、体制崩壊後は古河公方・地域社会と接点を深めた様子を描く。江田「戦国期の境

界領域支配」は、戦国期、宇都宮領の境界地域に注目し、家臣岡本氏が関与していた事実を突き止めた。同「改易後の国綱周辺」は、慶長二年(一五九七)に改易された後、宇都宮氏当主は徳川氏に奉公するも一族らが反徳川と接近し、復興は挫折したと論じる。

第二部。永村眞「中世宇都宮氏とその信仰」は、中世前期の下野宇都宮氏が時とともに浄土教・浄土宗・浄土真宗と信仰を深める姿を示す。山本勉「宇都宮氏の造像と仏師」は、彫刻史の立場から当該期における宇都宮氏の造像を検討し、慶派との関係を明らかにする。山本享史「鎌倉時代における在京活動と東大寺」は、宇都宮氏が宗教や仏師と深い接触を持ちえたのは在京活動のゆえと強調する。深沢麻亜沙「南北朝時代における院派仏師起用について」は、中世後期の宇都宮氏が造像において、室町幕府と近い院派を登用した事態を説明する。田淵句美子「百人一首」の成立をめぐっては、謎とされてきた百人一首の誕生に宇都宮氏が関与していた可能性を説く。飯塚真史「描かれた歴史と重臣芳賀氏」は、

宇都宮氏当主・家臣の図像を網羅的に収集した結果、南北朝期以前の姿を描いたものが多い事実を導く。千田孝明「宇都宮氏と『日光山並宇都宮社縁起絵巻』」(コラム)は既出の、本田論「新出の個人蔵「足利尊氏像」について」(補論)は新出の史料を分析している。

続けて「中世の北関東と京都」を紹介する。第一部「北関東の武士・荘園と平安王朝」は中世前期を、第二部「北関東の国主と京・鎌倉両公方」は中世後期を、第三部「北関東の大名・国衆と織田政権」は中近世移行期を扱った内容となっている。

第一部。野口「藤原秀郷と秀郷流武士団の成立」は、下野における秀郷流藤原氏の成立と展開を京都との関係から迫る。山本享史「秀郷流武芸故実と下野」は、秀郷流武芸故実に注目し、武士の成立における地域の重要性を説く。飛田英世「常陸平氏の成立に関する試論」は、常陸平氏の形成を都鄙両面から迫る。築瀬「天仁元年浅間火山災害と徳政」は、上野における荘園の誕生を、自然災害以外、院政期特有の徳政思想から読み解いた意欲作。

第二部。清水亮「南北朝・室町期の「北  
関東」武士と京都」は、京都との関係から  
中世後期東国武士を論じる。寺崎理香「南  
北朝期の佐竹一族と京・鎌倉」は、佐竹氏  
と京都・鎌倉のつながりを追うが、上杉氏  
を準足利一門としたのは誤り。佐久間弘行  
「二人の下野守」は、小山氏の乱に新たな  
光を当てるが、木下聡「武家における「下  
野守」」(栃木県立文書館研究紀要)一五、二  
〇(一年)も参照。森田真一「永享三、四  
年の都鄙間交渉からみた上杉憲実」は、京  
都・越後・関東の都鄙連関から上杉憲実の  
政治的位置を再検討する。

第三部。金子拓「織田信長と東国」は、  
織田信長の東国政策を俯瞰する。そして、  
青木裕美「織田政権と上野国」、江田「織  
田政権と下野国」、長塚孝「織田信長と常  
陸国」は、いずれも上野・下野・常陸と国  
ごとの様相・展開を具体的に跡付けた貴重  
な論考群である。

以上、両書は時間的にも長く、空間的に  
も地域と中央(京都・鎌倉)の都鄙連続を  
意識し、テーマ的にも広く、世代的にも多  
彩であるなど、優れた地域史となっている。

今後、どのような総論(日本史における北  
東・宇都宮氏の位置付け)が描かれるのか衆  
しみだ。(谷口雄大)

山田康弘著

『足利義輝・義昭』

——天下諸侍、御主に候——』

(ミネルヴァ日本評伝選)

ミネルヴァ書房 二〇一九・二二刊

四六 四〇四頁 三三〇〇円

本書は、戦国期の足利将軍、室町幕府研  
究を牽引してきた著者が、幕府末期の将  
軍・足利義輝(第十三代)・義昭(第十五代)  
兄弟について述べた評伝である。義昭につ  
いてはこれまで奥野高廣氏、近年では最新  
の研究成果を取り入れた久野雅司氏による  
著作もあるが、義輝について扱った本格的  
な評伝としてはじめてであろう。

さて、表題のように、本書は二人の将軍  
をあつかったものであるが、著者はこの点  
についてはしがきで、あえて、そうしたの  
だと述べている。戦国時代において義輝・

義昭兄弟は単純に分けて考えるものではな  
く、両者の連続性を理解するという意味で  
は二人をあつかう意味があるろう。そのうえ  
で、彼らがどのように時代、大名らと  
「戦ってきたのか」という点に重点を置く。  
序章では本書の導入として、戦国時代と  
はどのような時代であったのか、そして将  
軍の凋落、何故応仁の乱後にすぐに滅亡し  
なかつたのかなどを、列島全体のなから  
見取り図を示している。

第一部では義輝・義昭兄弟の父である第  
十二代将軍足利義晴の活動を述べ、彼は  
「凡器」ではなく、自律した政務運営や、  
大名からも頼られる存在であったことなど  
を評価している。次いで、本書の主役であ  
る義輝については、細川京兆家(徳願家)、  
京兆家の被官でありながら、畿内で台頭し、  
義輝と抗争を繰り返した三好氏との比較か  
ら、「未完の英主」と評価している。ただ、  
本書では、義輝期の幕府内の構造面には触  
れられておらず、あくまでも義輝と三好氏  
との関係に主眼がおかれている。

第二部では、最後の将軍・義昭に移るが、  
義昭については、昨今多くの研究が蓄積さ

れてきた。そのなかで、本書では義昭と信長との関係を重点的に記述している。そのため、義昭期の幕府構造など、内部構成についての記述は少なく、あくまでも將軍と大名勢力との関係に主眼が置かれる。

特に、元龜四年(一五七三・天正元)に京都から没落したあと、各地を流浪し、最終的に毛利氏を頼った義昭の活動、それを取り巻く大名の思惑などを明解に述べている。京都没落後も將軍であった義昭の活動は、「室町幕府」の終焉はいつなのかという問題とも関わるものであり、本書では、なぜ義昭が幕府再興を断念したのか、その理由を豊臣秀吉の台頭と絡めて述べている。

かつて、奥野高廣氏は『足利義昭』(人物叢書)で、京都没落後の義昭の活動を一切評価しなかったが、むしろ天正期の義昭の有様こそ、將軍家がなせすぐに滅亡しなかったのか、足利將軍家とは何かという重要な問題を解く手がかりがあることを教えてくれるものである。

また、本書全体の特徴としていえることは、ともすれば難解になりがちな評伝において、極めて平易に彼らの人物像が描かれ

ていることである。そのため、人によっては、物足りなさを感じるかもしれない。あくまでも彼ら二人の將軍、または戦国時代の將軍に対する入門という意味では本書は格好なものとなるう。(木下昌規)

ティルトンカル・ロイ著 水島司訳

### 『インド経済史』

——古代から現代まで——

名古屋大学出版会 二〇一九・一〇刊  
A5 三四〇頁 四二〇〇円

本書は、T. Roy, *India in the World Economy: From Antiquity to the Present*, Cambridge: Cambridge University Press, 2012の全訳である。本書では、インド亜大陸と他地域との交易に焦点を当て、古代から現代に至るまでの歴史が描かれている。第一章「序論・インドとグローバル・ヒストリー」に示されている通り、本書の目的は、インド亜大陸という一つの地域を軸においたグローバル・ヒストリーを提示することにある。そのために、ある

制度や文化、伝統などを共有する人々が、異なる背景を持った人々との取引にどのように関わったのかという「接触」に重点を置いている。

第二章「二〇〇年までの港と後背地」、第三章「後退する陸のフロンティア 一二〇〇〜一七〇〇年」では、主に、ヨーロッパ諸勢力の本格的な到来以前までの状況を検討する。インド亜大陸では、まず、地理的な制約の下に形成された、河川交通を軸に結びついた港と後背地から成る交易圏が個別に複数展開し、また、そうした交易圏が主に展開した沿岸部と、農業を基調とする国家が成立していた内陸部との結びつきは限定的であった。この状況は、一三世紀以降、南北にそれぞれ沿岸部までを支配する広域の政権が成立すると変化し始め、沿岸部と内陸部の結びつきは徐々に強まりを見せたという。

第四章「インド洋貿易 一五〇〇〜一八〇〇年」、第五章「貿易・移民・投資 一八〇〇〜五〇年」、第六章「貿易・移民・投資 一八五〇〜一九二〇年」、第七章「植民地化と開発 一八六〇〜一九二〇年」

では、ヨーロッパ諸勢力の到来以降に見られた変化を分析する。この時期には、地理的な制約が緩和され、政治・経済の中心は沿岸部へと移っていった。一九世紀初頭以降の市場の統合や労働移民を主とする人的な移動の活発化は、植民地統治下で導入された共通の法・言語・知識や鉄道・蒸気船などが基盤となったとして、イギリス帝国が果たした役割を評価している。

第八章「恐慌と脱植民地化 一九二〇～五〇年」、第九章「貿易から援助へ 一九五〇～八〇年」、第一〇章「市場への回帰 一九八〇～二〇一〇年」、第十一章「結論：新しいインド？」では、両大戦間期以降の経済的ナショナリズムの台頭、独立後インドの社会主義的な工業政策と製造業や貿易での停滞、一九八〇年代以降の世界市場への再参入などの過程で見られた様々な展開を説明する。なお、本書末尾に付された訳者解説では、近年の南アジア経済史やグローバル・ヒストリー研究の動向および本書の意義が簡潔にまとめられている。

原文のニュアンスをできるだけ改変せず、に翻訳するという訳者の意図ゆえに、か

えって、一読しただけでは理解しづらいところもある。しかし、従来の議論の中心であった土地制度ではなく、交易を主題として通史を試みた本書の意義は大きく、これに邦語でアクセスできることは南アジアの経済史を学ぶ者にとって喜ばしいことである。また、本書は、グローバル・ヒストリーを実践するあり方の一つとして、特定地域の歴史を叙述する手法を提示するものでもあり、グローバル・ヒストリーに関心のある方にも手に取っていただきたい一冊である。

(嘉藤慎作)

訂正 史学雑誌第百二十九編第七号

表紙に次のような誤りがありました。訂正させていただきますとともに謹んでお詫び申し上げます。

(誤) 宮崎 一夫

(正) 宮崎 和夫